

みんなで見守る復興住宅

～集住型復興住宅研究とコミュニティ誘発デザイン提案～

インテリア分野 柴崎ゼミ A2201709 加茂小春

研究の背景

東日本大震災により、津波被害や放射能被害などで仮設住宅での生活を余儀なくされた被災者は約 114,000 人いる。また、現在、復興住宅で生活する人は約 42,000 人である。そのうちの 35%が高齢者だと言われている。そして高齢化が進む復興住宅で一人暮らしの高齢者による孤独死などの社会問題が起きている。さらに復興住宅では人々の交流が仮設住宅に住んでいたときよりも減少している。現在、日本は超高齢社会であり、総人口のうち65歳以上の高齢者は 27%だと言われている。その割合は年々増加しており、このようなことは決して避けることができない問題となっている。その社会問題を復興住宅の中で解決することはできないかと考えた。

研究の目的

復興住宅はマンション型が多いため、仮設住宅に比べ住民同士の交流が少なくなっている。交流が少ないため一人で住んでいる高齢者の異変に気づけず孤独死してしまうことが問題となっている。復興住宅の中にバリアフリーを取り入れ、高齢者が住むために快適な空間を考え、その上でこの孤独死を防ぐために、周りの住民が高齢者の安否を見守れるような復興住宅を提案したいと考えている。

計画(研究のプロセス)



事例調査のまとめ

県北3か所、県中1か所にて災害公営住宅の現地調査と県営北沢又団地自治会長さんへヒアリング調査を行った。



↑ヒアリング調査の様子

○現地調査で分かったこと

- ・プライバシーを重視する住民がいる
- ・コミュニティスペースはあるがほとんど活用されていない

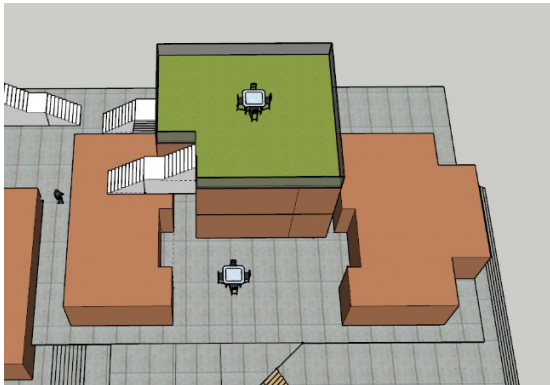
○ヒアリング調査で分かったこと

- ・一人暮らしの高齢者は引きこもりがちである
- ・仮設住宅に比べて巡回(見守り)しづらい造りである

完成作品

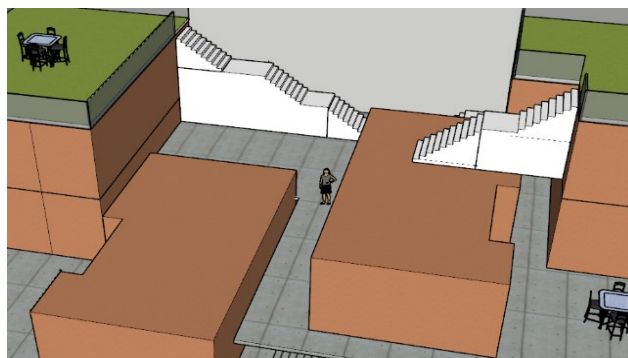
○ 模型

○ 論文



↑ 住戸の間取り (1LK)

住戸の扉を向かい合わせることでお互いの出入りが把握できるようにデザイン検討した。さらにリビングアクセス型であるため共用廊下から見守りをする事が可能であるようにした。



4 戸ずつにまとめ、それを6つにグルーピングして、その高さをそれぞれ変えてデザインした。あえて高さを揃えないことで、周囲を見渡すことに目を向けてもらう。コミュニティスペースは共用廊下だけでなく屋上庭園にも設けている。

考察

集合住宅のように大人数が密集して暮らす場合、周囲の目は気になることはあっても、他の住民に対する興味は希薄であることが多いほか、隣の住民の名前さえも知らないこともある。住民同士必ずしも、仲良くしてほしいとか無理に交流を持ってほしいと思っているわけではない。高齢になればなるほどコミュニティを広げるのはとても難しく、勇気がいるものだ。特に一人暮らしの男性高齢者は引きこもりがちであり、自らコミュニティを築きに行くなんてことは困難だろう。コミュニティスペースは、必ず誰かと一緒になければ使用できないということはない。一人で使ってもいいのである。そこからコミュニティが生まれる可能性もあるかもしれない。例えコミュニティが生まれなくても、そのスペースを使っているところを住民たちが見守っているかもしれない。近隣住民とコミュニティを広げてほしいという思いはあるが、住民がお互いを認知し、見守る環境が整っているだけでも、ある種のコミュニティを築けるのではないかと考える。